

機関番号：17102
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20520292
 研究課題名(和文) スタンダール『ミーナ・ド・ヴァンゲル』『薔薇色と緑』草稿研究
 研究課題名(英文) Studies on the manuscripts of Stendhal's "Mina de Vanghel" and "Le Rose et le Vert"
 研究代表者
 高木 信宏(TAKAKI NOBUHIRO)
 九州大学・人文科学研究院・准教授
 研究者番号：20243868

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、スタンダールの重要な作品『ミーナ・ド・ヴァンゲル』と『薔薇色と緑』の創作過程を明らかにすることである。まず2008年度にグルノーブル市立図書館(フランス)において草稿の調査をおこない、草稿のPDF画像を入手した。ついで2009年度には、前者のテキストを転写し、これにもとづいて同作の創作過程を詳細に分析した。最終年度には、どのようにしてスタンダールが中編小説『ミーナ・ド・ヴァンゲル』を長編小説『薔薇色と緑』に作りかえようとしたのかを考察した。

研究成果の概要(英文)：The aim of these studies is to elucidate the writing process of two important Stendhal texts: *Mina de Vanghel* and *Le Rose et le Vert*. During fiscal year 2008, we researched the manuscripts conserved in the Municipal Library of Grenoble (France) and obtained PDF files of them. In fiscal year 2009, we transcribed the manuscripts of *Mina de Vanghel*, and on the basis of this transcription, we analyzed its writing process in detail. In the last fiscal year, we examined how Stendhal tried to adapt this novella to the novel, *Le Rose et le Vert*.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：19世紀仏文学，フランス近代小説，スタンダール，ロマン主義

1. 研究開始当初の背景

(1)我々は本研究に先だって、『赤と黒』(1830年公刊)の制作方法にかんする調査をフランスでおこなってきたが、その資料収集の過程において同作と執筆時期が重なる『ミーナ・ド・ヴァンゲル』の自筆草稿を閲覧する機会をえた。その草稿に記された作家の備忘のひとつには、ほぼ完成していた後者の草稿を

『赤と黒』のような長編小説へと作り変えるアイデアが示されているばかりか、じっさいに1837年には『薔薇色と緑』という題名のもとに長編小説化が試みられている。つまりスタンダールが『赤と黒』の構想に倣って『ミーナ・ド・ヴァンゲル』の物語を膨らまそうとしたのは明らかであり、『薔薇色と緑』の草稿と併せてその生成過程を考察すること

によって、作家が長編テキストを構築する際の発想や手法に新たな光をあてることができるのではないかと考えた。

(2)以上が本研究課題を着想した背景であるが、もちろん国内外の研究のなかで同種の研究が手付かずのままであったことも本研究の動機のうちには数えられる。『ミーナ・ド・ヴァンゲル』と『薔薇色と緑』の近年の校訂版テキスト（ジャン=ジャック・ラビアによるフラマリオン版〔1998年〕とフィリップ・ベルティエ等によるプレイアド新版『小説全集』〔2005年〕）は、余白メモ等を註に採録し、転写の精度も高く十分に信頼に値するものの、紙幅の都合もあってか、すべてを網羅的に収録しているわけではない。だが何よりも既存の版の状態では、創作過程のあり様を一望に収めることはむつかしく、生成批評版の利便性には遠く及ばない。こういった点も含めて、実地での草稿調査にもとづく研究に着手する必要を強く覚えた次第である。

2. 研究の目的

スタンダールは長編小説『赤と黒』や『パルムの僧院』などにより、フランス近代小説の始祖として文学史上に大きな足跡を残した作家であるが、代表作の草稿や原稿、校正刷等が散逸しているために、その創作の実態を具体的に考証することは今なお困難な状況にある。それゆえ、グルノーブル市立図書館に所蔵されている中編小説『ミーナ・ド・ヴァンゲル』とその長編ヴァージョンである『薔薇色と緑』の自筆草稿に残された加筆や削除、余白メモ等をそれぞれ精査・分析することによって、スタンダールのロマネスクな創造行為の具体相について実証的に考察することが可能となろう。したがって、研究の目的は、『ミーナ・ド・ヴァンゲル』と『薔薇色と緑』のテキスト生成過程にかんする正確な仮説を提出し、これを踏まえてスタンダールの小説創造における特有の発想法や方法上の特徴を明らかにすることである。

3. 研究の方法

(1)グルノーブル市立図書館に所蔵されている『ミーナ・ド・ヴァンゲル』と『薔薇色と緑』の草稿について現地での調査をおこない、既成の校訂版テキスト（フラマリオン版『薔薇色と緑』〔1998年〕およびプレイアド版『小説全集』〔2005年〕）との異同を精査するとともに、これらの校訂版では一部割愛された作家の書込みや修正箇所などについて詳細なデータ収集をおこなった。さらにこうした作業を帰国後も継続するために、同図書館にてPDFによる草稿の複製を入手した。

(2)つぎに、以上の基礎的な資料調査を踏まえて、研究対象となる資料体の構築作業に移った。『ミーナ・ド・ヴァンゲル』の草稿の内容を網羅的に記録・整理し、執筆と修正の時期を確定したうえで、その記述内容を忠実に転写・採録した、いわゆる「生成批評版」の作成に着手した。PDFの画像上では判読不可能な箇所（薄れた文字、鉛筆による書込み等）については、記述内容を確認するために再度フランスでの草稿調査を実施し、資料体の構築に万全を期した。

(3)上記の作業と並行して、両作品にかんする研究書・学術論文、並びに生成論関連の文献を収集し、研究対象を多角的に検討・考察するための基礎固めに努め、最終年度に予定するテキストの分析作業に備えた。なお、入手困難な文献や資料については、渡仏の際にフランス国立図書館等において渉猟した。

(4)最終点検を目的とした短期の海外調査を実施し、具体的かつ実質的な概観の提示にむけての整理・統合作業を行った。作成した『ミーナ・ド・ヴァンゲル』の生成批評版にもとづいて執筆過程を分析し、これによって得られた知見をもとに、両作品の創作にかんする総合的な考察を試み、さらにはスタンダールの小説創造を探求するための新たな視点を模索した。前者のテキストの様々な要素が後者ではどのように展開、あるいは変更・削除されたのか、後者において新しく採用された要素は何なのか、といった点を中心に検討することで、スタンダールの構想や創作方法の特徴を解析した。

4. 研究成果

(1)『ミーナ・ド・ヴァンゲル』の生成批評版を作成した。具体的には、スタンダールの自筆草稿を解読して転写したテキストを、それらの画像と見開きの形で組み合わせ、草稿の状態を明瞭に把握できるようにする作業である。この生成批評版は基礎的な学術資料として、実証的・文学史的な研究領域だけにとどまらず、テキストの解釈においても研究に資することが期待できる。ちなみに同作品の草稿は作家の手稿からのみ成っている。部分的な欠落があるものの、同資料によって執筆のおおよその推移が視角的に把握できるようになった。また、作成の過程で従来の校訂版には採録されていない加筆等を補ったが、しかしながらいくつかの抹消箇所ではインクの経年劣化による濃度の著しい低下もあって、訂正前の文章を十分に読みとることができなかったことも付言しておく。

(2)『薔薇色と緑』の方は、筆耕による口述筆記によって作成された草本が基礎をなしており、これに10数葉の自筆草稿がつけ足されている。この点が前者の稿本との大きな相違をなしているが、同時にこうした特徴から、『薔薇色と緑』の創作は、『パルムの僧院』と同じように半ば即興的に執筆が進んだことが窺い知れる。また、同作は途中で執筆が放棄された未定稿ではあるものの、スタンダールの自筆による修正が施されており、また余白には創作に関する備忘も散見される。ただし入手したPDFファイルの一部に重大な解像度の問題が生じたため、生成批評版の作成については見送らざるをえなかった。

(3)『ミーナ・ド・ヴァンゲル』の制作期間にかんしてこれまでの先行研究は明言を避けてきたが、草稿に記された備忘等を調査した結果、次のように2段階に分けておこなわれたことが明らかになった。

①まず下書きが1829年12月29日から1830年1月7日にかけて制作されている。具体的には12月29日にスタンダールは草稿の第1葉から第20葉までを、翌30日には第21葉から第44葉までを書いている。以降は同様のペースを保ったまま、1月7日に下書きを脱稿したと考えられる。

②1830年1月7日に下書きを仕上げた作家は、同日からテキストの推敲に着手している。この作業は余白に残されたメモの記述から判断するならば、1月19日まで続けられている。単純に計算するならば13日が費やされたことになり、下書き作成の倍の時間が割かれている。

③以上の工程には、途中で長い中断は認められず、まさしく一気呵成に創作が行われたことが分かる。従来からスタンダールの速筆については、『アルマンズ』の創作にかんするメモ等から推測されるどころだが、この特徴は『ミーナ・ド・ヴァンゲル』の草稿の調査を通じて改めて明確な輪郭をもって確認できた。すなわち、下書きを書き進める過程において字句や表現等の手直しを交えるのではなく、まずは草稿をいったん書き上げてから、その後で細部の修正に着手するという手順である。こうした方法上の特色には、同作が『ルヴェ・ド・パリ』誌への寄稿のために執筆された小品であったことが関与しているとはいえ、『パルムの僧院』などの長編小説の創作にも共通しており、留意すべきものと考えられる。また、物語の結構については、『赤と黒』のベルテ事件のような何らかの材料があったのではないかと推測される。

(4)修正における特徴として特に興味深い点は、下書きの段階では語り手による女主人公の心理的説明だった部分が、推敲の段階にお

いて内的独白に書き換えられている点が挙げられる。これは作中人物の内面をよりいっそう直接的に提示する手法であり、ジョルジュ・ブランのいう「視野の制限」と並んでスタンダールの〈主観的なリアリズム〉をなす要素だからである。この技法が下書きを作成する段階ではなく、推敲段階において加えられている点から、スタンダールの創作における修正作業の重要度ばかりでなく、同手法がきわめて意図的に実践されていたことも確かめられた。

(5)『ミーナ・ド・ヴァンゲル』の物語において主題をなしているのは、題名の示すとおり女主人公の人物像そのものである。この中編小説はいわば性格劇なのであるが、人物像の成立した背景については単なる思いつきから出た創案とは見なせない側面がある。

①ジルベール・デュランの分類に倣えば、女主人公ミーナはスタンダールの小説世界において〈アマゾネス〉型のヒロインに該当する。作家が同タイプの女性を小説に登場させたのは、『ミーナ・ド・ヴァンゲル』の創作に先立つ時期、つまり1829年10月末から12月初めにかけての期間に相次いで執筆された『赤と黒』『ヴァニナ・ヴァニニ』が最初であり、フランス人のマチルド・ド・ラ・モール、イタリア人のヴァニナ・ヴァニニに続いて、ミーナは〈アマゾネス〉のドイツ的な変奏と位置づけることができる。換言するならば、この時期、作家の想像力は、常軌を逸した行動をとる情熱的な娘というイメージにすっかり魅了されていたのであり、こうしたコンテクストを看過することはできない。

②これら3人の女主人公はしかし、大胆さや熱情の激しさなどといった類似にもかかわらず、それぞれの性格や心理の設定はかなり異なっている。このうちミーナの人物造型において、スタンダールの想像力の源泉となっているのは、多くの先行研究が指摘するように、彼が1806年から1809年にかけて経験したドイツ滞在の思い出にほかならない。モーツァルトの憂愁に通底するドイツ娘「ミネット」の面影を求める追憶が、『ミーナ・ド・ヴァンゲル』の創作を方向づけており、その痕跡は草稿上にも確認できる。見方を変えるならば、女主人公はモーツァルトのように〈感じやすい魂〉をもつ人物として設定されているのである。

③『ミーナ・ド・ヴァンゲル』を長編小説化する過程で、女主人公の設定をユダヤ人に変更する案も浮上しているが、『薔薇色と緑』では再び夢想的なドイツ娘に戻されて、当初のような人物像が物語の核となっている。ただし貴族からブルジョワ（銀行家の子女）へと設定の変更がなされている点は、七月王政の社会状況を踏まえたものであろう。

(6)『薔薇色と緑』のテキストは、2種の草稿からなっている。1837年4月19日に口述筆記によって作成された草稿と、1837年4月18日から5月20日までの期間にパリで筆耕に書きとらせた草稿であり、同年6月4日から8日にかけてスタンダールは逗留先のナントで後者の草稿に手を加えている。この第2草稿には自筆による書き足しが認められるが、その大半がパリの風俗描写にかかわるものである。このことから、スタンダールが1830年1月22日に『ミーナ・ド・ヴァンゲル』の草稿に記したプラン、すなわち『赤と黒』に倣って2巻本の長編小説にする際には、異国の風俗に驚く外国人のまなざしを介してフランス社会を描くという方針に忠実に執筆を進めたことが指摘できる。

(7)『薔薇色と緑』の草稿分析を通じて浮かびあがるもうひとつの創作方法の特徴は、スタンダールが作品全体の下書きが出来上がる前に、挿話を書き足したり、細部の描写を膨らませたりしていることである。この点において『ミーナ・ド・ヴァンゲル』の創作方法と異なるだけでなく、公刊された長編作品、すなわち『アルマンズ』『赤と黒』『パルムの僧院』などの事例とも相違している。だが他方では、同様の手法は、未完の長編小説『ラミエル』の創作に共通している。また両者の草稿には、物語の構成を確認するためのプランが散見される点も似通っている。したがって、『薔薇色と緑』の創作が難航し、最後には物語の半ばでその執筆が放棄されてしまったのは、下書き作成過程での、こうした大幅な修正という、いわば手法的な変数が多分に災いしたのではないかと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ①高木信宏, 『スタンダールの『ミーナ・ド・ヴァンゲル』——創作過程と女主人公像の造型をめぐって』, 九州大学人文科学研究院『文学研究』, 査読無, 第108輯, 2011, pp. 13-30.
- ②Nobuhiro TAKAKI, « Quelques remarques sur la publication du *Couvent de Baiano* : dix lettres inédites de Henri Fournier à Paul Lacroix », *HB, Revue internationale d'études stendhaliennes*, 査読有, n° 15-16, 2011, pp. 181-194.
- ③高木信宏, 〈スタンダール＝クラブ〉余話——ポール・レオトーのアドルフ・ポープ宛未刊書簡, 九州大学フランス語フランス文学研究会『ステラ』, 査読有, 第29号, 2010, pp. 59-66.

④高木信宏, 『バイアーノの修道院』の出版をめぐって——アンリ・フルニエのポール・ラクロー宛未刊書簡, 九州大学人文科学研究院『文学研究』, 査読無, 第107輯, 2010, pp. 87-114.

⑤Nobuhiro TAKAKI, « L'amour et l'imagination créatrice : Modelage du type de l'Amazone chez Stendhal », *HB, Revue internationale d'études stendhaliennes*, 査読有, n° 13-14, 2009, pp. 63-72.

⑥高木信宏, エッツエル版『赤と黒』をめぐって, 九州大学人文科学研究院『文学研究』, 査読無, 第106輯, 2009, pp. 27-44.

[学会発表] (計2件)

①Nobuhiro TAKAKI, « Au sujet du texte de base de l'édition Hetzel du *Rouge et le Noir* : les éditions posthumes de Stendhal », "Balzac et alii, génétiques croisées. Histoires d'éditions" (国際シンポジウム), Le Groupe International de Recherches Balzaciennes, 2010年6月5日, La Maison de Balzac (Paris / France).

② Nobuhiro TAKAKI, « L'amour et l'imagination créatrice : Modelage du type de l'Amazone chez Stendhal », "Stendhal et l'Éros romantique. Tradition et Modernité" (国際シンポジウム), Stendhal Aujourd'hui, 2009年3月27日, Institut National d'Histoire de l'Art (Paris / France)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高木 信宏 (TAKAKI NOBUHIRO)
九州大学・人文科学研究院・准教授
研究者番号：20243868

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし